梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第４章

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、
ピーター・ダニエル・サント

１　はじめに

前稿に引き続き、本稿では『サマーヨーガ・タントラ』（*Sarvabuddha-samāyogaḍākinījālasaṃvara*）第４章の梵文和訳を提示する。第４章は 25 偈からなり、sarvato-viśvasubhagottamasiddhir nāma śrīsamayakalpa と名付けられる[1]。

２　第４章の科段

本章の暫定的な科段を示すと次の通りである。

［4.1：序］
［4.2：Subhagottamakāmukaについて］
［4.3：五境の享受］
［4.4：金剛薩埵の修行の対象たる女性について］
［4.5：享受対象としての仏菩提］
［4.6–9：自利円満］
（4.6：金剛薩埵の享受対象）
（4.7：ヘールカ・蓮華舞自在・毘盧遮那からの悉地・吉祥・幸福の奪取）
（4.8：金剛日からの王国の奪取）

[1] ただしその章題の意味は難解であり、仮に「遍く一切の最上の幸運の悉地という吉祥三昧耶章」と訳しておくが、とくに subhaga という語が問題となる。subhaga は形容詞としても名詞としても理解でき、どちらかに限定しがたい。例えば 4.2 偈を踏まえるならば、女尊たちとの結合において得られる境地を指すものとも理解できるが、同時にタントラ的な bhaga の語義を前提としている可能性もある。現段階で語義の確定はできないため保留しておく。

（4.9：最勝馬からの自在性の奪取）
［4.10–12：世間的な利他円満］
（4.10：世間三神からの配偶女神の奪取と信者への施与）
（4.11：王国の奪取と信者への施与）
（4.12：宗主権の奪取と信者への施与）
［4.13–14：出世間的な利他円満］
（4.13：行に制約がないことについて）
（4.14：仏菩薩の境地の奪取と施与）
［4.15–21：方便としての変現］
（4.15–16：利他的な変現―導入）
（4.17–20：変現としての仏伝）
（4.21：変現のまとめ）
［4.22–23：金剛薩埵としての行者の徳性・自利］
［4.24–25：金剛薩埵としての利他行］

注目されるのは、4.6–12偈においてみられる、五部族（毘盧遮那、ヘールカ、蓮華舞自在、金剛日、最勝馬）および世間神（シヴァ神、ヴィシュヌ神、梵天、カーマ神）から、各々のもつ徳性や配偶女神を、金剛薩埵と一体化した行者が力づくで奪い取り（apahṛtya）、自ら享受する（upabhuñjati）、あるいはそれらを信者に施与するという表現である。同様に、シヴァ神、ヴィシュヌ神、梵天、カーマ神から各々の配偶女神ないし徳性を奪うべしとする描写は、5.92–91偈や9.151–154偈にも説かれる。

３　仏伝の「密教化」

もう一点特筆すべきは、4.15–21偈における種々の変現としての仏伝の描写である。まず4.17–19偈では、釈尊の過去世における発心、菩薩行、降兜率、入胎、降誕、出城、苦行、降魔、成道、初転法輪、外道調伏が説かれる。通常の仏伝ならばこの後にその他の場面が続いて般涅槃で完結するは

ずだが、本タントラでは次のように続いている。

> ある場面では一切悉地の自在性、吉祥降三世。ある場面ではこの上ない一切儀軌の最高の成就についての自在性。（4.20偈）

続く 4.21 偈は、一連の仏伝が遊戯による舞踏であることを明かす[2]。

> 以上のような、終わりも始めもない、一切仏を自己とする最勝楽によって、つまり調御の方便としての歓喜の遊戯を通じた変現によって、彼は舞踏する。（4.21 偈）

問題となるのは、上記 4.20 偈の内容が 4.17–19 偈所説の仏伝とどのような関係にあるのかという点である。残念ながらプラシャーンタミトラとプラムディタヴァジュラの注釈においてこの点は明かされていない。しかし上記の一連の偈頌は『サンプタ』に借用され[3]、そして『サンプタ』の当該偈はアバヤーカラグプタによって詳細に語釈されている。それゆえ、以下にはその語釈を通じて 4.20 偈の当該の問題について解決の糸口を探りたい。

アバヤーカラグプタは『アームナーヤマンジャリー』（D1198）第 33 章において『サンプタ』9.1 を釈する。当該箇所の科段を提示すると下記の如くである。左端に見出しを提示し、中央に『サンプタ』9.1.6–10 偈（= 『サマーヨーガ』4.16c–21b 偈）の対応文言を挙げ、右端に D1198 の対応箇所を示す。

---

[2] 遊戯による世界創造は、例えば主宰神論証の文脈でも議論にのぼる（cf. 片岡 2009: 58–59; 2010: 44）。またシヴァ教の世界創造説は Sanderson 1992: 282–291 によくまとめられている。この点は種村隆元氏よりご教示頂いた。

[3] Szántó 2016: 417.

『アームナーヤマンジャリー』（D1198）第 33 章の仏伝記述
導入：sarvabuddhamahāṛddhivikurvāṇasaṃpravartakaḥ の語釈（288a6）
釈尊の過去世での発心：bodhimahācittaṃ の語釈（288a6–b4）
釈尊の過去世での菩薩行：caryā yathānugā の語釈（288b4）
入胎：tuṣitadevebhyaḥ avakramaṇam uttamaṃ の語釈（288b4–6）
降誕： jātiviśuddhā の語釈（288b6–289a1）
青年期：（該当する文言なし）（289a1–2）
出城： niṣkramaṇaṃ sphuṭaṃ の語釈（289a2–4）
苦行遍歴：bodhimahāyātrā の語釈（289a4–6）
降魔成道：māraparājayaḥ, bodhyabhisaṃbodhiḥ の語釈（289a6–7）
初転法輪： cakrapravartanaṃ の語釈（289a7–b1）
三道宝階降下：（該当する文言なし）（289b1–2）
異教徒の調伏： paratīrthyānāṃ saha dharmeṇa nigrahaḥ の語釈（289b2–4）
金剛乗の教化： sarvasiddhīśvaratvaṃ, śrītrailokyavijayaṃ, sarvakalpāgryasiddhaiśvaryam anuttaram の語釈（289b4–7）
弥勒への授記：（該当する文言なし）（289b7）
般涅槃：（該当する文言なし）（289b7–290a3）
むすび：evamādyais tv anantāgraiḥ sarvabuddhātmasaṃvaraiḥ の語釈（290a3–7）

アバヤーカラグプタは、タントラ本文の語釈をしながら仏伝の場面を時系列に沿って並べる。しかもタントラ本文に言及がない仏伝場面については自らその場面を補い（上記の「該当する文言なし」と記した箇所）、発心から般涅槃までの一連の物語を完結させる。その内容は『律事』（*Vinayavastu*）などの記述と一致する表現を含むオーソドックスかつ伝統的な仏伝である。ただその中でひときわ特異なものが、上記に太字で記した見出し「金剛乗の教化」の箇所である。これは通常の仏伝には決して存在しない場面である。そしてこの箇所が問題の 4.20 偈の語釈箇所に対応する。その箇所について、直前の「異教徒の調伏」の末尾箇所も含めて和訳を示すと以下

の通りである。

> ［釈尊は］そのような所化の場に近づいてから、種々の方便を通じて、［所化なる衆生の］資質に応じて無数の衆生聚を三乗において調御なさった後に[4]、［彼らを］善趣という果および解脱たる菩提に安立せしめた。［いっぽうで、］大乗に適した聡明な人々に関しては、［釈尊は］持金剛などの姿を通じて**一切悉地自在性**（sarvasiddhīśvaratva）[5]を示し、金剛乗（rdo rje theg pa）を教示した（『初会金剛頂経』「金剛界品」）。そこにすら入らない大自在天などについては、三世輪の曼荼羅に引き入れることなどを通じて、所化のために**降三世王**の姿で現れた（同「降三世品」）。遍調伏などの諸品（同「遍調伏品」「一切義成就品」）では、大悉地の無上の支配力を示した[6]。

ここでは仏伝の一場面として、「持金剛などの姿で金剛乗を示し」、「降三世王の姿で現れた」ことなどが説かれる。これらは明らかに『初会金剛頂経』の章立てに沿った内容であり、「金剛界品」「降三世品」「遍調伏品」「一切義成就品」を踏まえている。すなわち伝統的な仏伝の場面に『初会金剛頂経』所説の場面を追加し、いわば仏伝を「密教化」しているといえる。

---

[4] *Sūtaka* に記される次第説法（Wedemeyer 2008: 461–462）も参照。

[5] この表現は『初会金剛頂経』所出の一切義成就菩薩（Sarvārthasiddhi）の五相成身観を暗示していると理解しうる。

[6] D1198, 289b4–7: de lta bu la sogs pa'i gdul bya'i gnas rnams su nye bar byon nas | thabs rnam pa sna tshogs pa rnams kyis skal pa ji lta ba bzhin du sems can gyi phung po dpag tu med pa rnams theg pa gsum rnams la btul nas | bde 'gro'i 'bras bu dang thar pa'i byang chub tu yang rab tu bkod do || theg pa chen po la rung ba shes rab rno ba rnams kyi dbang du byas te | rdo rje 'dzin pa la sogs pa'i gzugs kyis **dngos grub thams cad kyi dbang phyug nyid** (*Saṃputa* 9.1.10a ≈ *Samyoga* 4.20) nye bar ston cing | rdo rje theg pa bstan to || de la yang mi 'jug pa dbang phyug chen po la sogs pa 'jig rten gsum gyi 'khor lo'i dkyil 'khor du gzhug pa la sogs pas gdul bya'i ched du **'jig rten gsum las rnam par rgyal ba**'i sku ru gsal bar gyur to || 'gro ba 'dul ba la sogs pa'i brtag pa rnams su yang dngos grub chen po'i lhag pa'i bdag po nyid bla na med pa nye bar bstan to ||

具体的には、「異教徒の調伏」の場面を拡大して、『初会金剛頂経』における降三世明王によるシヴァ神の折伏の場面などをその中に包摂している。

この場面の後にアバヤーカラグプタは、タントラ本文には説かれない「弥勒への授記」と「般涅槃」の仏伝場面を追加して、仏伝を完結させる。換言すると、アバヤーカラグプタは『初会金剛頂経』を組み込んだ形で仏伝を構築しなおして、仏伝を密教化したといえる。そして彼の理解はタントラ本文の内容を的確に捉えたものでもある。

仏伝の密教化という手法は既に『初会金剛頂経』自体に見られ、そこにおいて釈尊の成道の場面を密教観想法である五相成身観に置き換えている点は周知の通りである。そしてこの『初会金剛頂経』を踏まえたのが『サマーヨーガ』4.20 偈といえる。つまり同偈は伝統的な仏伝に密教の場面を追加したといえる。

４　和訳について

『サマーヨーガ』の梵本としてはDhīḥ本が刊行されているが、テクストに大きな問題を含むため、本稿の和訳は、共著者の一人であるサント氏が準備している校訂本（サント本と略）にもとづく。なおサント本は未刊行であるため、Dhīḥ本との読みが異なる箇所については稿末の【資料1】にまとめて示し、本和訳が依拠したテクストが確認できるように配慮した。梵文校訂に際しての校勘記はサント本に委ね、本稿では割愛する。

訳文中の角括弧は文脈上補った言葉を示し、丸括弧は補足的説明を示す。なお必要に応じて、プラシャーンタミトラとプラムディタヴァジュラの注釈における理解を注記に示した。これら注釈において用いた太字はタントラの本文を意味する。上記２種の注釈およびインドラナーラ注については各偈毎の対応箇所の所在を稿末の【資料2】に提示した。

和訳

［序］

4.1

実に瑜伽にして如来なるかの世尊金剛薩埵は、一切仏との結合を通じたダーキニーたちの網からもたらされる最勝楽である（sarvabuddhasamāyoga-ḍākinījālasaṃvaram）[7]。

［Subhagottamakāmukaについて］

4.2

一切女尊と交わる幸運な最上の恋人（kāmuka、つまり行者）は、［女尊との結合による］楽の味わい（sukhāsvāda）との強固な結びつき（atisaṃyoga）を有し、堅固かつ永遠なる（sthiraśāśvata）カーマ神である（manmatha）[8]。

---

[7] プラシャーンタミトラ注（D1663, 66b3–4）「以上のように世尊がヨーガ、アヌヨーガ、アティヨーガを本質とすることを三つの章（第 1–3 カルパ）により示してから、一切不退の智を成就するために、サルヴァヨーガ（sbyor ba thams cad）の修習を特徴とする、sarvato-viśvasubhagottamasiddhir nāma śrīsamayakalpa（第 4 章表題）の本質を示すために、「実に」云々と説く。この偈頌によって、導入の章と連結しているという観点から、残余の二章（第 2・3 章か）と連結しているとみるべきである」。ヨーガ、アヌヨーガ、アティヨーガ、サルヴァヨーガについては、伊集院ほか 2020 を参照。

[8] 「堅固かつ永遠なる」（sthiraśāśvata）については解釈の余地が残される。すなわち行者自体を形容しているとも理解でき、あるいは「堅固かつ永遠」なる安楽（sukha）、または味わい、または強固なむすびつき（atisaṃyoga）を指すとも理解しうる。なお同偈の別訳としては例えば以下の様な理解も可能である。「一切女尊との結合による最上の幸運を望む人（kāmuka, ここでは行者を指す）は、［女尊との結合による］楽の味わいとの強固な結びつきを有し、堅固かつ永遠なる愛着者である（manmatha）」（下線部は訳の異なる箇所）。

プラシャーンタミトラ注（D1663, 66b4–5）「sarvadevīsamāyoga とは、全ての女尊と享楽（paribhoga）することであり、それによって、自らを成就し、女尊と共に結合するので、subhaga である。まさにそれゆえ、このように、女性の遊戯の中にあるので、uttamakāmuka（最上の恋人）である。女尊との結合（devīsamāyoga）の格別の楽の味わいとの強い結合、それが sukhāsvādātisaṃyogaḥ である。稀有なる愛（anurāga）により全ての女尊を愛着するので manmatha であり、サルヴァヨーガによって、瑜伽者は成就する」。

［五境の享受］

4.3

彼（行者）は一切仏の偉大なる色声香味の宴（utsava）および一切仏の楽なる接触（sukhasparśa）を、自身の［安楽の］諸享受（svopabhoga）を通じて/として経験する（bhunakti）[9]。

［金剛薩埵の修行の対象たる女性について］

4.4

諸仏の、成就せる波羅蜜（四波羅蜜と十波羅蜜）、陀羅尼、［仏菩薩の十二の］諸地は、好ましい（ramante）。ましてや（kiṃ punar）幸運（subhaga）なる神や人間の女性（nārī）たちが［修行において好ましいことは言うまでもない］[10]。

［享受対象としての仏菩提］

4.5

不死（amara）にして為し難く（duṣkara）、成就し（siddha）、大楽を有し（mahāsukha）、楽の味わい（āsvāda）による甚だしい幸運（atisubhaga）を

---

[9] プラシャーンタミトラ注（D1663, 66b6）「**声**とは、ここでは音声の意味で［用いられる］。**触**とは、心地よい接触を伴って触れることであると知るべし。それらについて、**諸享受を通じて経験する**（svopabhogair bhunakti）とは、安楽を捉えることによって享楽することである」。

[10] 4.3 で示された享受の対象を得るための修行手段として女性に言及しており、通仏教的な修行方法に対する金剛薩埵の修行方法の優越性について説いていると理解した。つまり ab 句の内容よりも cd 句の内容のほうが勝れていることを示しており、前者が一般的な境地を示し、本書独自の境地（subhaga と関与するもの）を示すと理解できる。

　プラシャーンタミトラ注（D1663, 66b6–67a3）は下記のとおり。「以上のように金剛薩埵の果の享受を説示した後に、毘盧遮那などの果を享受することについて説示するために、**諸仏の**、云々という。四波羅蜜（菩提・宝・法・業）と、布施波羅蜜・戒波羅蜜・忍辱波羅蜜・精進波羅蜜・禅定波羅蜜・般若波羅蜜・方便波羅蜜・誓願波羅蜜・力波羅蜜・智波羅蜜という、これら全ての**波羅蜜**と、普賢などの**陀羅尼**、および不生菩提の地・歓喜地・離垢地・発光地・焔光地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善想地・法雲地・普光地（仏地）という十二の**諸地**である。**女性たち**（bdud med→bud med, nārī?）というのは、魔たちの支配から自由となっている者である」。

有する仏菩提を自ら、漸次成就する（pratyanusidhyati）[11]。

［4.6–9：自利円満］

4.6（金剛薩埵の享受対象）
彼（行者）は一切悉地から生まれた（sarvasiddhisamudbhūtāṃ）[12]、一切如来（金剛薩埵）の一切享受による幸運をもつ（sarvopabhogasubhaga）吉祥（śrī）を、自らの諸享受（svopabhoga）を通じて/として経験する（bhunakti）[13]。

4.7（ヘールカ・蓮華舞自在・毘盧遮那からの悉地・吉祥・幸福の奪取）
持金剛者（ヘールカ）から勝れた悉地を、世自在（蓮華舞自在）から勝れた吉祥を、諸仏（毘盧遮那）から勝れた幸福（saukhya）を、［それぞれ］奪い取った後に（apahṛtya）、そのうえに享受する（upabhuñjati）[14]。

---

[11] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a4–5）「**成就し**（siddha）とは完成していることである。**為し難い**とは、劣った有情は三阿僧祇劫の間の卓越した精進を通じて成就せられるべき対象だからである。**大楽**とは、あらゆる成就は不変の楽を本質とするからである。**楽の味わいによる甚だしい幸運を有する**（sukhāsvādātisubhagāṃ）とは、極度に卓越した楽を味わうから**甚だしい幸運**（atisubhaga）であり、悟りのために自ら全てのヨーガを顛倒なく修習することによって成就する、と接続する」。

[12] 二つの注釈は「一切悉地を生み出す」という意味で理解し、内容的により好ましい。

[13] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a5–6）「**一切悉地**とは、虚空行などの悉地であり、それらが順に完成することを、**生まれた**（samudhbūta）という」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397a1–2）「以上のように概説を示した後に詳説を示す。初心者のための金剛薩埵の行を示して、**一切悉地から生まれた**、云々という。普賢の部族と一致する四尊のムドラーにおける行である」。

[14] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a6）「**仏**とは毘盧遮那のことである。**奪い取った後に**とは、観想力により自在にすること（支配すること）である。**享受する**とは、味わうことである」。
プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397a2–4）「ヘールカの行は、**持金剛者から勝れた悉地**といい、憤怒界の自在女の部族と一致する四印と無漏の安楽を生じることである。蓮華舞自在の行は、**世自在から勝れた吉祥**といい、白衣女と一致する四印における安楽の修習のことである。毘盧遮那の行は、**諸仏から勝れた幸福**、云々といい、仏の印の部族と一致する四印における安楽の修習のことである」。

4.8（金剛日からの王国の奪取）
三界の一切仏の偉大な王国（金剛日の境地）をあまねく、強引に力ずくで（prasahya balasā）、勇敢に（pauruṣeṇa）奪い取った後に（āhṛtya）、そのうえに享受する（upabhuñjati）[15]。

4.9（最勝馬からの自在性の奪取）
彼は一切諸仏の大悉地たる最高最勝の自在性（paramaiśvarya、最勝馬の境地）を奪い取った後に（samākaḍhya）、そのうえに享受する（upabhuṅkte）。ましてや（kim uta）、その他の諸々の繁栄（vibhūti）について［享受すること］はいうまでもない[16]。

［4.10–12：世間的な利他円満］[17]

4.10（三神からの配偶女神の奪取と信者への施与）[18]
彼は、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）から貞節なる（sthira）ラクシュミー女神（lakṣmī、または「不動な富」）を、ハラ（シヴァ神）からシッディ（ドゥルガー女神、または「成就」）を、スマラ（カーマ神）からラティ女神（または「歓喜」）を、力ずくで強引に（prasahya balasā）奪い取り（āhṛtya）、信者（bhakta）たちに与える（pradadāti）[19]。

---

[15] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a6–7）「**一切仏の偉大な王国**とは、金剛日の境地のことである」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397a4）「金剛日の行については、**あまねく三界**、云々という。マーマキーの部族と一致する四尊のムドラーにおける安楽のことである」。

[16] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a7）「**一切諸仏の大悉地たる最高最勝の自在性**とは、最勝馬の境地のことである」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 379a4–5）「最勝馬の行について、**一切諸仏の大悉地**、云々という。ターラーと対応する四尊のムドラーにける安楽を修習することである」。

[17] この見出しはプラムディタヴァジュラによる。

[18] 5.92–95 偈においても、シヴァ、ヴィシュヌ、梵天、カーマから各々の配偶女神を奪うことが説かれる。9.151–154 偈にもシヴァ、ナーラーヤナ、梵天、カーマから各々の徳性を抜き取る描写が現れる。

[19] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67a7–b1）「自利円満を教示した後に、利他円満を教

4.11（王国の奪取と信者への施与）

彼は、一切の世間の富財ごと（sarvalokeśvaraiḥ saha）[20]、全ての三界の王国（trailokyarājya）を、力ずくで強引に奪い取った後に、信者たちに与える[21]。

4.12（宗主権の奪取と信者への施与）

梵天・ヴィシュヌ・大自在天（brahmaviṣṇumaheśa）から、最上の最勝自在性（pāramaiśvarya）を奪い取った後に（samākaḍhya）、速やかに［信者たちに］与える。ましてや、その他の諸々の繁栄（vibhūti）についてはいうまでもない[22]。

［4.13–14：出世間的な利他円満］[23]

4.13（行に制約がないことについて）

示するために、**ナーラーヤナ**、云々と説かれた。**シッディ**とは、ドゥルガー女神のことである。**スマラ**とは、カーマ神のことである」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397a5–7）「以上のように最高の悉地智の女尊について解説した後に、世間の悉地の禅定の女尊を解説する［偈］が、**ナーラーヤナから貞節なるラクシュミー女神を**、云々という。**ナーラーヤナ**とはヴィシュヌ神のことであり、**貞節なるラクシュミー女神**とは、彼の妻のことである。**ハラ神から**とは、大自在天のことであり、**シッディ**とは、［その妻たる］ウマー女神のことである。**スマラ**（dran pa）とは、カーマ神のことであり、**ラティ**とは彼の妻である。**力ずくで強引に奪い取り**とは、目の前に引き寄せてから、自らの享受と心の把握と灌頂とガナチャクラをなす**信者に施与する**べきである」。

[20] lokeśvara は観音を意味するところの「世自在」ではなく、世間的な富財を意味し、lokaiśvarya と同義であると理解した。次注参照。但しこの解釈に再考の余地は残る。

[21] プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397a7–b1）「以上のように［四神の］宝の如き妻たちの成就を教示した後に、王国の成就については、**全ての三界の王国を**、云々と言う。三界の主における一切の富財を**奪い取った後に**、自らも享受して、**信者に与える**のである」。三界は世間の三神の支配領域または地下・地上・天空を指すか。

[22] プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397b1–2）「以上のように王国の成就について教示した後に、宗主権（bdag po）の成就については、**梵天・ヴィシュヌ・大自在天**、云々と説かれた。神々の王たちの宗主権を**奪い取った後に**、自ら享受して、信者にも**与える**のである」。

[23] プラムディタヴァジュラ注による。

この者に、与えてはならないものは何もない（nādeyaṃ kiṃcid asyāsti）。そして為してはならないことは［何も］ない（nākāryaṃ vidyate）。一切仏の利益および為すべきこと（sarvabuddhārthakāryāṇi）を［各々］与えそして行う（dadāti ca karoti ca）[24]。

4.14（仏菩薩の境地の奪取と施与）
［彼は］仏の境地（buddhatva）と菩薩の境地（bodhisattvatva）を奪い取った後に（apahṛtya）、［信者たちに］与える。ましてその他の諸悉地と、さまざまな最上の［現世利益的］儀礼行為（karmāgraprasara）[25]［を信者たちに与えること］についてはいうまでもない[26]。

［4.15–21：方便としての変現］
［4.15–16：利他的な変現―導入］

4.15
［彼は］さまざまな実りある者（amoghaprasaraḥ）として成就し、一切の軍勢を打ち破り（sarvasainyaprabhañjaka）、一切仏の大成就者（sarvabuddha-mahāsiddha）、転輪王として成就する[27]。

---

[24] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b1）「**一切仏の利益**については、仏の一切の利益（artha）を与えることと、仏の一切の**為すべきこと**［を与えること］というように接続する（sarvabuddhārthakāryāṇi は並列複合語である）」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397b2–3）「それ（4.12 偈）によって世間の悉地を教示した後に、出世間の悉地については、**一切仏の利益および為すべきこと**、云々という。大楽の印によって刻印してからは大印を修習する瑜伽者に、**為すべからざること**（ākārya）は何一つない」。

[25] karmāgraprasara は、チベット訳では las mchog dag ni rab 'byams とされる。prasara は、複数形の標識として理解し、「さまざまな」と訳した。この語には多義があり、広大さ、諸顕現、流出、拡散などの意味でも理解できる。

[26] プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397b3–4）「仏菩薩の智慧についてマントラ・タントラ・ヤントラの三つの方法によって**奪い取った後に**他者に**与える**のだから、世間的**悉地**［を奪い取ってから他者に与えること］**についてはいうまでもない**」。

[27] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b1–2）「**一切の軍勢を打ち破り**とは、一切の魔の軍勢を打ち破ることである。**転輪王**とは法輪を転じる者のことである」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397b4–5）「大楽の刻印の力によって最高の悉地を獲得し、一切

4.16

［彼は］、一切仏の集会たるダーキニーの網の最勝楽（sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśaṃvara）により[28]、一切仏の大神通による変現を顕し出す（mahāṛddhivikurvasaṃpravartaka）[29]。(≈ *Saṃputa* 9.1.6ab)

［4.17–20：変現としての仏伝］[30]

4.17

ある場面では（kvacid）菩提の偉大なる心（つまり発心）。ある場面では［過去世における］適宜ふさわしい行い（caryā yathānugā、六波羅蜜などの菩薩行）。ある場面では兜率天（tuṣitadeva）からのもっともすぐれた入［胎］（avakramaṇa）[31]。(≈ *Saṃputa* 9.1.6cd–7ab)

4.18

ある場面では清浄なる（viśuddhā）誕生（jāti）。ある場面では城からの出立（niṣkramaṇaṃ purāt）。ある場面では菩提への大遍歴（bodhimahāyātrā、苦行）。ある場面では降魔（māraparājayaḥ）[32]。(≈ *Saṃputa* 9.1.7cd–8ab)

降魔（cf. sarvasainyaprabhañjakaḥ）と、智円満資糧の**大成就者**（cf. sarvabuddhamahāsiddhaś）と、**転輪王**としても成就するだろう」。

[28] -śaṃvaraiḥ という複数形は、複数の瑜伽女の存在を前提としているか。

[29] 4.16cd–21ab は Saṃputa 9.1.6cd–9.1.11ab に借用され、Āmnāyamañjarī に注釈される。本稿末【資料 3】を参照。プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b2）「**大神通による変現**（vikurva = vikurvā）とは、大神通による遊戯のことである」。

[30] この仏伝については本稿の序文に詳しく述べ、稿末【資料 3】に関連資料を提示した。プラムディタヴァジュラ注は 4.17–21 を変化身に配当する。

[31] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b2–3）「そのこと（4.16）を詳細に教示するために、**ある場面では**（kvacid）云々という。**菩提の偉大なる**（bodhimahā）とは、無上正等覚の心のことである。**行**（caryā）とは、布施などの特徴をそなえた［波羅蜜行］である。**適宜ふさわしい**（yathānugā）とは、適宜適合した（*yathānurūpa）ということである。**入［胎］**（avakramaṇam）とは生を取ること（誕生）である」。プラムディタヴァジュラ注（D1660, 397b5–6）「一切世間において化作した転輪王として留まることを示して、kvacid bodhimahācittaṃ 云々と言う。所化を教化する方便の成就のことである」。

[32] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b3–4）「**菩提への大遍歴**（bodhimahāyātrā）とは、

4.19

ある場面では菩提の現等覚（bodhyabhisaṃbodhi）。ある場面では転法輪（cakrapravartana）[33]。そしてある場面では、異教徒たちを［彼らの］教えもろとも調伏すること（paratīrthyānāṃ saha dharmeṇa nigrahaḥ）。(≈ *Saṃpuṭa* 9.1.8cd–9ab)

4.20

ある場面では一切悉地の自在性（sarvasiddhīśvaratva）、吉祥降三世（śrītrilokavijaya）。ある場面ではこの上ない一切儀軌の最高の成就についての自在性（sarvakalpāgryasiddhaiśvarya）[34]。(≈ *Saṃpuṭa* 9.1.9cd–10ab)

菩提のための遍歴のことであり、菩提道場（*bodhimaṇḍa）に至るまでの間のことである。あるいは bodhimahā とは大宴（*mahotsava）のことであり、歓喜して信解することが大であるので、bodhimahāyātrā というのである」。

[33] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b4–5）「**転法輪**とは法輪を転じることに入ること（開始すること）である」。

[34] 4.20 偈に関してプラシャーンタミトラとプラムディタヴァジュラは注釈をしないが、4.20 偈を借用する Saṃpuṭa 9.1.10 に対するアバヤーカラグプタの注釈によってその意図が知られる。すなわち『初会金剛頂経』の内容を仏伝の一部として組み込んでいる。本稿序文および【資料 3】を参照。

参考までにインドラナーラ注（D1659, 285b7–286a6）は次の通り。「［仏は］身によって所化たちに対して、**ある場面では一切悉地の自在性、吉祥降三世を**［示す］、つまり、ある時ある場所で衆生のために適宜御身を示現するのである。根本タントラに、『ある場面では寂静なる者には梵天の姿、ある場面では恐ろしい閻魔の在り方、ある場面では賢者の姿をも保ち、ある場面では劫末の焔のように燃え、ある場面では万人の導主をなさり、ある場面では万人を降伏なさり、ある場面では無数の曼荼羅聚、ある場面ではひとりの勇者として顕われ、ある場面では器世間を創造なさり、ある場面では器世間を空にし、ある場面では寂静と憤怒の姿を拡散し、ある場面では曼荼羅を収斂なさる』と言い、所化聚に対して種々の曼荼羅を通じて対象に寄り沿った仕方で安心/鼓舞させなさる。語の乗（gsung gi theg pa）によって調御することについては、**ある場面ではこの上ない一切儀軌の最高の成就についての自在性**、［と言う］。蘊界処の相違に沿って未了義と了義の二つを始めとして、多くの次第をもつ乗に敷衍して仰った。また、根本タントラに、『劣った見解をもつ凡夫（異教徒や声聞など）を導くために劣った理解（rtog→rtogs）を持つ者のための道を教示した。悪習の困難かつ劣った影響力により輪廻内の悪趣の在り方を見ず、分別という障礙聚の極端によって解脱智を見ない者を、わずかでも解脱に引き寄せる。［そして］智慧と慈悲の在り方を信じる者については（mos pa'o→mos pa）解脱させ、無辺なる乗を通じて、解脱の地に結び付けなさる。［さらに］クリヤーとチャルヤーを信じる者については、真言の義を行とする最勝大

4.21（変現のまとめ）
以上のような、終わりも始めもない（anantāgraiḥ）一切仏を自己とする最勝楽（sarvabuddhātmaśaṃvara）によって、つまり調御の方便としての歓喜の遊戯を通じた変現（vinayopāyaratikrīḍāvikurvita）によって、彼は舞踏する（nartati）[35]。 (≈ *Saṃpuṭa* 9.1.10cd)

［4.22–23：金剛薩埵としての行者の徳性、自利］[36]

4.22
全てのもののなかで最高なる大悉地をそなえ（sarvottamamahāsiddhi）、大自在性の主（māhaiśvaryādhipa）にして、堅固なる［行者］は、もうひとりの（aparaḥ）、美貌・寿命・威力・妙色［をもつ］吉祥金剛薩埵（rūpāyurbalavarṇa-śrīvajrasattva）[37]のごとくである。

4.23
［その行者は］世の人々により奉持され（sevyamāna）、諸如来により供養され、一切女尊たちの自在主（sarvadevīśvaraḥ）たる吉祥金剛薩埵として成就する[38]。

乗なる自己の智の在り方に入れて、真言行の広大な尊格に瑜伽させ、世間の所作を成就し、仮設された果をもって究竟に至る。極清浄なる最高の賢者については秘密甚深なる理趣を教示し、自らの大楽最勝自在と種々の荘厳によって解脱を示現する』という」。

[35] たとえば *Bodhicittavivaraṇa* 91–93 偈は釈尊の行相の示現および梵天・ヴィシュヌ・シヴァ神の姿として顕れて舞踏することを述べる（93: brahmendropendrarudrādipratibimba-pravarttanāḥ | jagadvinayayogena nṛtyante karuṇāśayāḥ ||. *Munimatālaṃkāra*, fol. 78r3）。

[36] プラムディタヴァジュラ注は 4.22–25 偈を受用身に配当する。

[37] この表現は 2.24、3.18 と関連する（siddhyec chrīvajrasattvāyuryauvanārogyasatsukham「吉祥金剛薩埵の寿命と若さと無病と最高楽が成就するだろう」）。また「もうひとりの金剛薩埵のごとく」（vajrasattva ivāparaḥ）という表現は、その行者が、金剛薩埵とほぼ同じ、または第二の金剛薩埵であることを述べようとしている。

[38] プラムディタヴァジュラ注は 4.25 の注記を参照。

［4.24–25：金剛薩埵としての利他行］

4.24

衆生界を、何度も余すことなく刻印し（āmudrayann、発心させて）、そして不死（amara）にして為し難い（duṣkara）堅固な菩提を、衆生たちに与えるだろう（pradadet）[39]。

4.25

そして余りなく残りなき一切のカルパにわたって、輪廻生存において（bhave）[40]、自ら、一切仏を自己とする最勝楽（sarvabuddhātmasaṃvara）によって、一切衆生利益（sarvasattvārtha）をなすのである[41]。

以上のように世尊吉祥金剛薩埵は述べた。

（章題）

一切仏の集会たるダーキニー網の最勝楽の中から、遍く一切の最上幸運たる悉地（sarvato-viśvasubhagottamasiddhi）という吉祥三昧耶章（śrīsamaya-kalpa）、第四[42]。

---

[39] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b5）「**余すことなく刻印させ**とは、菩提にむけて発心することである」。プラムディタヴァジュラ注は 4.25 偈の注記を参照。

[40] bhave という読みは蔵訳 srid par と一致する。

[41] 4.23–25 偈までについてプラムディタヴァジュラ注（D1660, 398a1–3）はまとめて次のように説明する。「またその受用身を確定するものは何かと考えるならば、［次の四点である。つまり］①四女尊の中に金剛薩埵がお坐りになることと（4.23），②六部族の曼荼羅のやり方で菩薩たちを**刻印すること**と（4.24），③世間の神々および至高なる（出世間なる）菩薩たちをも**衆生に施与すること**と（4.24）*，④輪廻のある限り多くの劫に渡って有情利益のために輪廻生存の流れに入ることである（4.25）」。（*「菩薩たちを」（byang chub sems dpa' rnams）と訳した語については、「菩提をも」（byang chub）と訂正して、「菩提をも衆生に与える」と読むならば、4.24cd の bodhiṃ sattvebhyaḥ pradadet と一致する。）

[42] プラシャーンタミトラ注（D1663, 67b5–6）「viśva とは多様ということ。sarvataḥ とは五部族のことであり、subhaga（幸運）でありかつ uttama（最上）であるところの siddhi（悉地）を教示するので、sarvato-viśvasubhagottamasiddhi という。śrī とは女尊たちの

【資料 1：サント本と Dhīḥ 本の異読リスト】

・本稿の梵文和訳はサント本を底本とした。既刊の Dhīḥ 本の読みがサント本と齟齬する場合、Dhīḥ 本の読みを採用せずサント本の読みを採用した。下記にはそれらの異読を列挙する。

・左側に Dhīḥ 本の読みを挙げ、矢印（→）の右側に採用すべきサント本の読みを挙げる。

・半偈ごとに異読を挙げる。但し連声の異読は原則として報告しない。

4.1　異読なし

4.2　ab: -kārmukaḥ　→　-kāmukaḥ

cd: sthiraśāśvata manmathaḥ　→　sthiraśāśvatamanmathaḥ

4.3　ab: -svarāmoda rasotsvāḥ　→　-svarāmodarasotsavān

cd: -sparśāś copabhogair　→　-sparśān svopabhogair

4.4　ab: siddhāḥ　→　siddhā

cd: punar nāyaḥ subhagā divyamān tathā

→　punar nāryaḥ subhagā divyamānuṣaḥ

4.5　ab: siddhāṃ　→　siddhiṃ

cd: svayampraty-→　svayaṃ praty-

4.6　cd: copabhogair　→　svopabhogair

4.7　ab: lokeśām　→　lokeśāt

4.8　cd: balamāhṛtya-　→　balasāhṛtya

4.9　ab: -mahāsiddhiparamaiśvaryam　→　-mahāsiddhiṃ paramaiśvaryam

cd: samākaṭyopabhukte ’sau kim utānyo

→　samākaḍhyopabhuṅkte ’sau kim utānyā

4.10　ab: lakṣmīharāṃ　→　lakṣmīṃ harāt

cd: balamāhṛtya-　→　balasāhṛtya

ことである。samaya とは逸脱すべからざるものであり、金剛薩埵のことである。それを教示するので、śrīsamayakalpa（吉祥と三昧耶の章）という」。

4.11　* Dhīḥ 本は当偈を含まないため、偈番号が 1 偈分ずれる[43]。

4.12　cd: samākaṭyadadātyāsu kimutonyā

→　samākaḍhya dadāty āśu kim utānyā

4.13　cd: sarvabuddhāna kāryāṇi　→　sarvabuddhārthakāryāṇi

4.14　ab: bodhisattvam →　bodhisattvatvam

4.15　cd: -mahāsiddhiś　→　-mahāsiddhaś

4.16　cd: -mahāsiddhiḥ vikurvansaṃpravartakaḥ

→　-mahāṛddhivikurvasaṃpravartakaḥ

4.17　ab: yathātathā　→　yathānugā

cd: apakramaṇam　→　avakramaṇam

4.18　ab: kvacij jātiviśuddhaṃ　→　kvacij jātir viśuddhā

cd: kvacid bodhamahāyātrā →　kvacid bodhimahāyātrā

4.19　cd: parabhītyānāṃ sahadharmeṇa　→　paratīrthyānāṃ saha dharmeṇa

4.20　cd: sarvakalpāgrya siddhaiśvaryam　→　sarvakalpāgryasiddhyaiśvaryam

4.21　ab: evamādir　→　evamādyair

cd: narnartti　→　nartate

4.22　異読なし

4.23　ab: jagahitas　→　jagadbhis

4.24　ab: āmudrann aśeṣan tu　→　āmudrayann aśeṣaṃ tu

cd: bodhisattvebhyaḥ pradade　→　bodhiṃ sattvebhyaḥ pradadet

4.25　ab: aśeṣānavaśeṣāś ca　→　aśeṣānavaśeṣāṃś ca

*本稿では 25b について次の様に訂正した。bhavet → bhave

cd: karoti sarvabuddhātmasaṃvaraiḥ buddhayogajaiḥ

→　karoti sarvasattvārthaṃ sarvabuddhārmaśaṃvaraiḥ

章題　ityāha bhagavācchrīvajrasattvas tathāgataḥ |

→　ity āha bhagavāñ chrīvajrasattvaḥ |

---

[43] Dhīḥ 本にはサント本の第 11 偈を欠いているが、Dhīḥ 本が元にした写本（NGMPP B112-17）には、当該偈は含まれている。

sarvatoviśvasubhagottamasiddhināma-

→ sarvatoviśvasubhagottamasiddhir nāma

【資料2：第4章注釈箇所対照表】

・下記の D1659、D1660、D1663 はそれぞれ、インドラナーラ注、プラムディタヴァジュラ注、プラシャーンタミトラ注のデルゲ版の番号（東北番号）を示す。

・表中の偈の番号はサント本に従った。

・Dhīḥ 本は第 11 偈を欠くため、以後 1 偈分ずれる。また末尾の説主の表示と章題の一部を韻文と見做し、偈番号（25）を振っている。これらサント本と偈番号が異なる箇所については、[ ] 内に Dhīḥ 本の番号を示した。

・蔵訳はサント本に一致する。

偈	D1659 (Indranāla)	D1660 (Pramuditavajra)	D1663 (Praśāntamitra)
4.1	276b7–277a6	396b2–3	66b2–4
4.2	277a6–b5	396b3–5	66b4–6
4.3	277b5–278a2	396b5	66b6
4.4	278a2–6	396b5–6	66b6–67a3
4.5	278a6–b1	396b7–397a1	67a3–5
4.6	278b1–280a1	397a1–2	67a5–6
4.7	280a1–4	397a2–4	67a6
4.8	280a4–5	397a4	67a6–7
4.9	280a5–7	397a4–5	67a7
4.10	280a7–284a3	397a5–7	67a7–b1
4.11 [—]	284a3–b1	397a7–b1	—
4.12 [11]	284b1–3	397b1–2	—
4.13 [12]	284b3–4	397b2–3	67b1

4.14 [13]	284b4–7	397b3–5	—
4.15 [14]	284b7–285a3		67b1–2
4.16 [15]	285a3–5	—	67b2
4.17 [16]	285a5–b7	397b5–6	67b2–3
4.18 [17]			67b3–4
4.19 [18]			67b4–5
4.20 [19]	285b7–286a6		—
4.21 [20]	286a6–b2		67b5
4.22 [21]	286b2–3	397b6–398a3	—
4.23 [22]	286b3–5		—
4.24 [23]	286b5–7		67b5
4.25 [24]	286b–287a2		—
章題 [25]	287a2–3	—	67b5–6

【資料３：『サマーヨーガ』4. 16c-21b に対するアバヤーカラグプタの理解】

本稿の序文で示したように、仏伝について語る『サマーヨーガ』4.16c–21b は『サンプタ』9.1.6e–11b において借用される[44]。そしてこれらの偈頌の解説は、『サマーヨーガ』の注釈類よりも『サンプタ』の注釈である『アームナーヤマンジャリー』のほうがより詳しい。特に『サマーヨーガ』4.20 は多様な解釈が可能であるが、『アームナーヤマンジャリー』の理解がとりわけ有用である。同書は仏伝を密教化して提示しており、インド仏教終焉期の顕密融合型の仏伝理解がここに提示されている点で貴重な資料といえる。そのため、以下に関連個所の全文を和訳して提示する。

『アームナーヤマンジャリー』には梵文写本の存在が知られているが（伊集院ほか 2019 参照）、下掲の箇所の梵本は未だ公開されていないため、蔵文（D1998, 288a6–290a7）を和訳して提示する。太字はタントラ本文の文

[44] Szántó 2016: 417.

言を示す（微細な訂正をした箇所もある）。注釈の対象となる『サンプタ』本文 9.1.6e–11b（≈ 『サマーヨーガ』4.16c–21b）については、理解の便を図るため、タントラ本文の文言を訳して挿入し、梵文テクストを括弧内に添えた（梵文テクストについては文献一覧参照）。他の仏典における仏伝の平行箇所については、仏伝記述を集めた森 2000 の関連箇所を示し、特に表現が近接する場合のみ関連するテクストに言及した（「破僧事」との共通記述が際立つ）。

『アームナーヤマンジャリー』
9.1.6e–11b注釈箇所和訳
（≈ 『サマーヨーガ』4.16c–21b）

（変現についての導入：D288a6）

一切諸仏の大神通による変現を顕し出す（sarvabuddhamahāṛddhi-vikurvāṇasaṃpravartakaḥ 9.1.6ef）[45]。

清浄なる者（行者）[46]はそれを証得して、**一切の仏の大遊戯**（mahārddhi）**によって変現して**（vikurvāṇa）、利他のために宴において拡散して、遊戯しながらにして、自らの本質を**顕し出す**（saṃpravartaka）のである。

（釈尊の前世・発心：D288a6–b4）

ある場面では菩提の偉大なる心（発心）（kvacid bodhimahācittaṃ 9.1.7a）。

---

[45] 文脈、注釈および『サマーヨーガ』梵本に従って『サンプタ』の梵本を訂正した。

[46] 「清浄なる者」（yongs su dag pa）は、性瑜伽をなす行者を指すと理解した。下記の『サンプタ』の直前の偈頌を参照。「その場に立つ勇者（行者）は［性的悦楽の］切片を持たず、切片を捨てており、一切の身体を超越し、汚れがなく、有身者たちのあいだで［世俗の姿として］遊戯する（tatra sthāne sthito vīro niṣkalaḥ kalavarjitaḥ | krīḍate dehināṃ sarvadehātīto nirañjanaḥ ||）」。

それ（変現）を顕し出すこと（saṃpravartaka）を説くために、**ある場面では**（kvacit）云々という。例えば、我々の教主は釈迦牟尼正等覚世尊であり、かつて［過去世では］プラディヨータ（rab gsal）という王として誓願の菩提心を起こした。またディーパンカラ世尊のもとでは、進趣の菩提心［を起こした］[47] (D288b)。また、世尊によって以下の様に説かれた。

> 釈迦牟尼仏から導主ドゥリタラーシュトラに至るまでの、七万七千の諸仏を私は供養し、私は勝者たちを供養して、第一の阿僧祇劫を過ごした。私の心に倦怠の心はなく、仏果を願いながら。
>
> ディーパンカラ仏［から］インドラドヴァジャ牟尼に至るまでの、七万六千の諸仏を私は供養し、私は勝者を供養して第二の阿僧祇劫を過ごした。
>
> クシャーマンカラ仏からカーシャパ仏に至るまでの、七万七千の諸仏を私は供養した。私は勝者たちを供養して、第三の阿僧祇劫を過ごした[48]。

云々と。

（過去世の菩薩行：D288b4）

> **ある場面では［過去世における］適宜ふさわしい行い**（kvacic caryā yathānugā 9.1.7b）

適宜ふさわしい（yathānugā）とは、三阿僧祇劫の間、かつて菩薩だった世尊が、布施などの［六］波羅蜜を行じて次第に完成させたということである。

---

[47] 森ほか 2000: 12–13 参照。

[48] 『根本説一切有部律』「薬事」からの引用。八尾 2013（セクション 9.12.10、D Kha 275b、T73c）を参照。

（釈尊伝）

（入胎：D288b4–6）

ある場面では兜率天からのもっともすぐれた入［胎］（kvacit tuṣitadevebhyaḥ avakramaṇam uttamaṃ 9.1.7cd）。

その後で、菩薩は利他のために、**兜率天**において生まれた。それから、正士なるシュヴェータケートゥ（Śvetaketu, Tog dkar po)というこの者（兜率天に居た時の釈尊の名前）は、［これから転生すべき］種姓、国、時節、家柄（父系）、女性（母となる人）をよく観察してから（brtags）、欲界（kāmāvacara）の諸天に［転生の宣言を］三度くりかえし聞かせて（*anuśrāvayati）、中夜に大象王の姿として［自身を］示現して、マハーマーヤー妃の子宮に入ったというのが、［釈尊の］**入［胎］**（avakramaṇa）である[49]。

（降誕：D288b6–289a1）

ある場面では清浄なる誕生（kvacij jātiviśuddhā hi 9.1.8a）。

それから十か月が過ぎて、妃から、ルンビニー園で真昼に［釈尊は］誕生した。世界も菩薩の偉大な光と輝きで照らし出されて、地面も六種に振動した。諸天によってもまた、虚空から種々の衣と傘と払子と華と栴檀などの散布がなされた。菩薩はまた胎内の汚れに纏われることなく、宝石のように（D289a）清らかな身体は、三十二大人相八十種好によって荘厳されてお生まれになった、というのが、**清浄なる誕生**である[50]。

---

[49] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 38.18–21: atha bodhisatvaḥ pañca vyavalokanāni vyavalokya ṣaṭ kāmāvacarān devāṃs trir anuśrāvayati ito 'haṃ mārṣās tuṣitād devanikāyāc cyutvā manuṣyeṣu pratisandhiṃ grahīṣyāmi rājñaḥ śuddhodanasyāgramahiṣyāḥ kukṣau. (≈ T24, 106c26–107a2).

[50] 森ほか 2000: 34–35 参照。

（青年期：D289a1–2）
それから［釈尊は］若者の技芸を示現した後に、ヤショーダラー、ゴーピカー（dangs skyong ma）を始めとする女性たち六万人の妻のとりまきの中に居られ［釈尊が彼女たちに手を出さなければ］、「この人（シッダールタ）は男ではない（apumān）のだから、出家したのだろう」という非難［が将来になされるであろうこと］を斥けるために、ヤショーダラー妃と交わった[51]。

（出城：D289a2–4）
ある場面では明瞭な［城からの］出立（kvacin niṣkramaṇaṃ sphuṭaṃ[52] 9.1.8b）。

それから［シッダールタは］帝釈天と梵天などの諸天によって促されて、［侍者］チャンダカと共に馬王カンタカに乗り、欲界天と色界天の諸天を付き従えたままに、［城内では諸天が降らした］種々の衣と花などは膝が沈むくらいの高さ（pus mo nub tsam, *jānumātra）にまで至り（地に降り積り）[53]、［城から出て］十二由旬ほど進まれた[54]、というのが**出城**（niṣkramaṇaṃ）であり、［そしてそれは］**明瞭なもの**（sphuṭaṃ）であることが［人々に］知られている[55]。

（さとりへの苦行遍歴：D289a4–6）
ある場面では菩提への大遍歴（kvacid bodhimahāyātrā 9.1.8c）。

---

[51] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 81.6–11: tato bodhisatvasyāntaḥpurasametasya niṣpuruṣeṇa tūryeṇa krīḍato ramamāṇasya paricārayata etad abhavat: bhaviṣyanti me atonidānaṃ pare vaktāraḥ śākyamuniḥ kumāro 'pumān, yena yaśodharāgopikāmṛgajāprabhṛtīni ṣaṣṭistrīsahasrāṇy apāsya pravrajita iti; yanv ahaṃ yaśodharayā sārdhaṃ paricārayeyam iti. (≈ T24, 115a26–29).
[52] sphuṭaṃ について『サマーヨーガ』は purāt と読む。
[53] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 89.17–89.3. (≈ T24, 117a7–15).
[54] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 89.29–30: atha bodhisattvo yāmadvayena dvādaśayojanāni samatikramya. (≈T24, 117b6).
[55] 森ほか 2000: 66–69 参照。

［釈尊は］チャンダカと馬王カンタカを［カピラヴァストゥ城に］帰還させて、［自分の］髪を剃刀で落として、帝釈天に与え、赤褐色の衣を纏い、沙門となって、ナイランジャナー川の岸辺で吸気と呼気（ānāpāna）を遮断し、不動三昧（mi g-yo ba'i ting nge 'dzin）[56]をもってして、ゴマ粒ひとつだけを召し上がるという苦行を六年間なさり、「これ（この修行方法）はさとりのための道ではない」と考えるや、［苦行をやめて］楽に呼吸をして、蜂蜜と乳粥を召し上がり[57]、［ある山に登り石の上で］坐するや否や、［その］大岩山が崩れ後に、諸天によって示された道を通って[58]カーラカ竜王によって称えられるまま[59]、さとりのために、大いなる喜びを伴って進まれた。

（降魔成道：D289a6–7）

ある場面では降魔、ある場面では菩提の現等覚（kvacin māraparājayaḥ kvacid bodhyabhisaṃbodhiḥ 9.1.8d–9a）。

金剛座の地に登り、菩提樹のふもとで、黄金色で木綿のように触り心地のよいクシャ草の上にお坐りになり[60]、36 コーティもの悪鬼（bhūta）の眷属を率いた欲界自在の魔を、慈しみという武器によって調伏なさり、無上正等覚を現等覚なさった[61]。

---

[56] 仏伝類の対応箇所によると呼吸を止める三昧を指す。なお『初会金剛頂経』の梵本冒頭で一切義成就菩薩が入定している三昧は āsphānakasamādhi と記されるが、これに対応するチベット訳も mi g-yo ba'i ting nge 'dzin である。

[57] これらの出家後の出来事については、例えば平岡 2010: 355–361 を参照。

[58] 釈尊が金剛座に向かう前に、それとは別の岩山で悟りを得るべく結跏趺坐すると、その岩山が悟りを得るにふさわしい場ではなかったために、岩山が自ら崩れたという出来事を指す。Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 111 (≈ T24, 122b12– c2)。森ほか 2000: 88。

[59] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 111–113 (≈ T24, 122c2– c23). 森ほか 2000: 89–90。

[60] 森ほか 2000: 90–91 参照。

[61] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 119.8–9: yadā bodhisattvena ṣaṭtriṃśadbhūtakoṭiparivāraṃ māraṃ maitreṇāstreṇābhinirjitya anuttaraṃ jñānam adhigataṃ. 森ほか 2000: 93–98 参照。

（初転法輪：D289a7–b1）

ある場面では転法輪（kvacic cakrapravartanaṃ 9.1.9b）。

梵天に勧請されて (D289b) ベナレスに赴かれて、［四諦］三転十二行相の**法輪を転ぜられた**（cakrapravartana）[62]。

（三道宝階降下：D289b1–2）

三十三天の場に赴かれて法を説示し、帝釈天と梵天など欲界と色界の諸天を従えたまま、サンカーシャの街に降下し、同時に存在する様を大神変で示現した[63]。

（異教徒の調伏：D289b2–5）

そしてある場面では異教徒たちを［彼らの］教えもろとも調伏した（kvacit paratīrthyānāṃ saha dharmeṇa nigrahaḥ 9.1.9cd）。

［釈尊は］**異教徒たち**（paratīrthya）をプラマーナによって**調伏/論破**（tshar bcad, nigraha）して[64]、カピラヴァストゥの森では、ハリ、ハラ、ヒラヌヤガルバ（梵天）、クマーラ、障礙主、インドラ、日天、月天、ラーフ、グラハ、星宿、シュリー（dpal mo）、多聞天、持国天、増長天、広目天、地天、火天、閻魔、水天などの天、ナーガ、夜叉、羅刹、ガンダルヴァ、修羅、ガルーダ、キンナラ、［あわせて］数万の者達を、涅槃および各々に適した法の説示を通じて**調伏**（btul, *nigraha）なさった[65]。

［釈尊は］そのような所化の場に近づいてから、種々の方便を通じて、

---

[62] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 129–139.

[63] 森ほか 2000: 178–179 参照。

[64] Cf. *Saṅghabhedavastu* (ed. Gnoli) I, 129–139.

[65] saha dharmeṇa については「異教徒を彼らの教えもろともに調伏した」という意味で理解したが、アバヤーカラグプタの注釈は「仏教の教えによって調伏した」という理解を示している。なおこの一段の逸話の典拠については確認を要する。

［所化なる衆生の］資質に応じて無数の衆生聚を三乗において調御なさった後に、［彼らを］善趣という果および解脱たる菩提に安立せしめた。

（金剛乗の教化：D289b5–7）

ある場面では一切悉地の自在性、吉祥降三世。ある場面ではこの上ない一切儀軌の最高の成就についての自在性（sarvasiddhīśvaratvaṃ ca śrītrailokyavijayaṃ kvacit | kvacit sarvakalpāgryasiddhaiśvaryam anuttaram 9.1.10）。

大乗に適した聡明な人々（shes rab rno ba）に関しては、持金剛などの姿を通じて**一切悉地自在性**（sarvasiddhīśvaratva）を示し、金剛乗を教示した[66]。そこにすら入らない大自在天などについては、三世輪の曼荼羅（'jig rten gsum gyi 'khor lo'i dkyil 'khor）に引き入れることなどを通じて、所化のために**降三世**王（śrītrailokyavijaya）の姿で現れた[67]。遍調伏などの諸品（'gro ba 'dul ba la sogs pa'i brtag pa rnams）[68]では、大悉地の無上の支配力（bdag po nyid, *ādhipateya）を示した。

（弥勒への授記：D289b7）

釈迦牟尼の姿で、ベナレスで聖弥勒に無上正等覚を授記して、現在、彼（弥勒）は太子として公認されている[69]。

（般涅槃：D289b7–290a3）

王舎城で(D290a)霊鷲山に登り、「阿難よ、マガダの地は喜びに足る」と仰り、ヴァイシャーリーでも、［臨終前に］「阿難よ、如来は四神足に頼って、［自

---

66 『初会金剛頂経』の金剛界品に対応する。
67 『初会金剛頂経』の降三世品に対応する。
68 『初会金剛頂経』の遍調伏品や一切義成就品などに対応する。
69 例えば『ラリタヴィスタラ』27 章に類似の逸話があるも、典拠は確認を要する。

ら］望むならば、一劫でも一劫以上でも留まることができる」と三度にわたって仰った。阿難が押し黙っていることを［仏が］察して、「経典に依拠してあるゆる［教え］は生じるが、人に依拠してではない」と学んだ[70]。

クシナガラ村（grong khyer ku sha can）では、四天王と帝釈天に教示を与えてから、衆生たちのために、金剛喩三昧で遺骨（sku gdung）をゴマ粒ほどにして、第四禅に入定し、不動の寂静に到達してからこの世界において般涅槃なさった[71]。

（無始無終：D290a3–7）

以上の、終わりも始めもない一切仏を自己とする最勝楽によって（evamādyais tv anantāgraiḥ sarvabuddhātmasamvaraiḥ 9.1.11ab）。

際限のない別の三界においても、［仏は］無量かつ不可思議なる種々の広大な変化聚によって絶え間なく、［人々に自身の］生誕など［の場面］を示現して、有身者（衆生）たちへの利益行によって、際限ない法の王権で以てよく遊戯して、いまなお［この世に］留まっている。広大な阿僧祇劫において法身として繰り返しあちらこちらで留まるであろう、という全てを意図して［次のように偈に］説かれた。**以上によって**（evamādayaiḥ）云々と。**以上によって**とは、化作の諸業によって、ということであり、**顕し出す**（saṃpravartaka, 9.1.6f）という先述の文言につながる。

始め（agra）とは最初のことである。【論難】もしそうであるならば、原因の段階のあとに［化作の］諸業があることになるので、「最初」が存在することになってしまう。【答】否。無量かつ無始なる諸仏にとっては［化作

---

[70] *Mahāparinirvāṇasūtra* §15.9: ramaṇīyānanda vaiśālī (...); §15.10: yasya kasyacic catvāra ṛddhipādā āsevitā bhāvitā bahulīkṛtā ākāṃkṣamāṇaḥ sa kalpaṃ vā tiṣṭhet kalpāvaśeṣaṃ vā. (...); §15.11: evam ukta āyuṣmān ānandas tūṣṇīm abhūt. (...). 末尾の一文（mdo sde la rton pas thams cad 'byung bar bya'i gang zag la rton pas ni ma yin no）は四依説を想起させる（*Mahāparinirvāṇasūtra* §24 参照）。

[71] 典拠については確認を要する。

の］諸業もまた無始だからである。

法身に依拠しているので広大（shin tu yang）であり、それゆえに［次のように］説かれた、**一切**（sarva）と。**一切仏を自体とする**（sarvabuddhātma）つまり、法性において存するところのものが、**大楽/律儀**（saṃvara）であり、それを本性として内に集約しているものが、そのように［すなわち sarvabuddhātmasaṃvara と］説かれたのである。

参考文献一覧

（一次資料）

Mahāparinirvāṇasūtra

Ed. E. Waldschmidt. *Das Mahāparinirvāṇasūtra*. Berlin: Akademie-Verlag, 1950–1951.

Samāyoga 『サマーヨーガ・タントラ』

= *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*. **(1)** Ed. Central Institute of Higher Tibetan Studies, *Dhīḥ: A Journal of Rare Buddhist Text* 58, 2018, pp. 141–201. （Dhīḥ 本と略す。Dhīḥ 本の底本の梵文写本 NGMPP B112/17 を併せて参照した。）**(2)** Ed. P.-D. Szántó, The *Sarvabuddhasamāyoga-ḍākinījālaśaṃvara*, forthcoming.（サント本と略す。サント本の底本の梵文写本であるコレージュドフランスのインド学研究室図書館所蔵 IÉI SL 48 については、伊集院ほか 2019 を参照。）

Saṅghabhedavastu 『破僧事』

Ed. Raniero Gnoli. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and the last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. Two vols., Rome: IsMEO, 1977–78.

Saṃpuṭodbhava

= *Saṃpuṭodbhavasarvatantranidānamahākalparājaḥ*. Ed. Wiesiek Mical. In

Dharmachakra Translation Committee. *Emergence from Sampuṭa: Sampuṭo-dbhavaḥ*. 84000 Project. 2021. (https://read.84000.co/translation/toh381.html)

（二次資料）

（和文）

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント

2019　「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第１章」、『大正大学綜合仏教研究所年報』41、61–100頁。

2020　「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第２～３章」、『大正大学綜合仏教研究所年報』42、1–36頁。

片岡啓

2009　「神を否定する方法―*Nyāyamañjarī*「主宰神論証」前主張部の読解―」、『哲学年報』（九州大学文学部）68、27–71頁。

2010　「ジャヤンタの主宰神論証―*Nyāyamañjarī*「主宰神論証」定説部の和訳―」、『哲学年報』（九州大学文学部）69、17–69頁。

平岡聡

2010　『『マハーヴァストゥ』ブッダの大いなる物語―梵文『マハーヴァストゥ』全訳』（上）、大蔵出版。

森章司、本澤綱夫、岩井昌悟

2000　「【資料集3】仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」、『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇 No. 3。

八尾史

2013　『根本説一切有部律薬事』、連合出版。

（欧文）

Sanderson, Alexis

1992　The Doctrine of the *Mālinīvijayottaratantra*. In: T. Goudriaan (ed.). *Ritual*

and Speculation in Early Tantrism. Studies in Honour of André Padoux. Albany: State University of New York Press, 281-312.

Szántó, Péter-Dániel

2016 Before a Critical Edition of the Sampuṭa. *Zentralasiatische Studien* 45: 397–422.

Wedemeyer, Christian

2008 *Aryadeva's Lamp that Integrates the Practices* (*Caryāmelāpakapradīpa*): *The Gradual Path of Vajrayana Buddhism According to the Esoteric Community Noble Tradition*. New York: American Institute of Buddhist Studies.

＜キーワード＞　サマーヨーガ・タントラ第４章、梵文和訳、仏伝

（令和２年度科学研究費[17H04517] [17K02222] [18H03569] [18K00074] [19K00062]による研究成果の一部。本稿の作成に際しては種村隆元氏から多くの助言を頂いた。本稿においてテクストの精読は共著者全員で行い、分担箇所については、タントラ本文の梵文校訂はサント、資料１は倉西、資料２は伊集院、序文・下訳・資料３・統括は加納が担当した。）